

朝鮮半島の情勢変化とロシアの北東アジア政策

ロシア科学アカデミー東洋学研究所朝鮮・モンゴル部長
アレクサンドル・ヴォロンツォフ

2018年の朝鮮半島の情勢は2017年秋の状況から劇的に変化した。しかし、昨年、安全保障面における全般的な状況が劇的に改善したとはいえ、特にワシントンと平壤との関係の面における状況は、不透明かつ脆弱なままにとどまっている。したがって、必要な教訓を得るためには、2017年後半に生じた危機が実際にどのようなものであったか、を思い出すことの意義は小さくない。現在、起こりつつある状況の劇的な変化を踏まえることによって、首脳外交が2018年の朝鮮半島を特徴づける局面であったことの意味を明確にできるのである。

2018年9月18日から20日に、文在寅韓国大統領は平壤への訪問を成功裏に実現した。コリア・ウォッチャーを驚かせたことは、朝鮮半島の連帯というメッセージが以前よりも強く打ち出されたことであった。キム・ヒョンジュン駐ロシア連邦朝鮮民主主義人民共和国大使は2019年1月11日に、ロシアにおける朝鮮研究の指導的な研究者との議論の中で発言した内容は注目に値する。2018年に行われた「板門店宣言」、「9月平壤共同宣言」、2018年9月19日の平壤における3回目の南北首脳会談の際に南北朝鮮の軍事高官の間で署名された軍事分野合意書は、全体として、事実上の「不可侵」条約であると北朝鮮の指導部によって見なされているということ、キム大使は強調したのである。

当然ながら、平壤首脳会談の結果は、南北和解と朝鮮半島問題の解決のプロセスが劇的に進展する状況の中で、米国が傍らに追いやられるのではないかという懸念をホワイトハウスに生むことにつながった。アメリカ合衆国大統領は、「金正恩は偉大な人物であり、北朝鮮の指導者である」と呼び続け、この状況を肯定的に評価しているが、それは、強硬路線の保守的な戦略をとる米国の行動とは合致しないものである。米国の制裁と強い圧力は、北朝鮮がどのような軍縮を実施しようとも、「完全に検証可能かつ不可逆的な非核化」が実現されるまで維持されなければならない、という主張を変える動きは全く見られないのである。

しかしながら、平壤は、駐北朝鮮大使の発言を引用しながら、北朝鮮の非核化は「一歩ずつしか進めることが出来ない、そして、それにはワシントンからの見返りが同時に示されなければならない、このことが相互の信頼関係につながる」ということを明確にした。つい最近に、このアプローチはソウルからも支持を得たが、それはソウルだけにとどまるものではなかった。

現在、米国と北朝鮮の2回目の首脳会談の準備作業が進められている。両国間の主たる障害は、次のようなものであると考えられる。ジョン・ボルトン国家安全保障問題担当大統領補佐官が率いるホワイトハウスの作業チームは、ドナルド・トランプ大統領が、米国に責任を課すようななどのような文書への署名も回避すべきだと主張している。それに対して、平壤は、交渉のすべての段階に関して両国に一定の義務を課すロードマップへの署名を引き出そうとしている。

金正恩國務委員長は新年の辞の中で、米国に対する和解的な態度と制裁緩和への要求を示した。このことは、米国と北朝鮮の2回目の首脳会談が肯定的な結果を引き出すことに関して、限定的ではあるが楽観主義を生み出す背景となっている。このような期待を支持するもう一つの重要な要因は、トランプ大統領自身が金正恩との対話に熱心であるということである。そのため、トランプ大統領にとってこのプロセスをあきらめることは容易ではないのである。

[ERINAにて翻訳]